

# 研究の概要

20 23 年 4 月 21 日

本研究の対象者に該当する可能性のある方で、診療情報等を研究目的に利用されることを希望されない場合は、下記の問い合わせ先にお問い合わせ下さい。

|                                 |  |
|---------------------------------|--|
| 研究課題名：                          | 精液所見不良症例における精子処理方法別の前核形成と妊娠成績の関連   |
| 代表研究者<br>(所属・氏名)：               | 医局 中岡義晴  |
| 研究の目的：                          | 精液所見不良の原因は、精索動脈瘤や酸化ストレスなど様々な理由が挙げられる。そのような精子を用いた顕微授精では、受精率の低下、流産率の増加などが報告されている。当院では精液所見不良症例における初期胚発生を観察し、前核形成の遅延を報告した。しかし、より所見不良の場合、密度勾配遠心法(DGC)を行わないことが多いためDNA損傷を受けている精子が多い可能性が考えられる。本研究では精子処理方法に着目し、前核形成と妊娠成績が関連するか検討した。 |
| 調査データ該当期間：                      | 20 21 年 1 月 1 日 ~ 20 21 年 12 月 31 日  |
| 研究の方法<br>(使用する試料/情報等)：          | 2021年1月から12月までに採卵し、原精液の総精子濃度が $15.0 \times 10^6$ /ml以下の顕微授精を実施した71周期748個を対象とした。精子処理法DGC+Swim-up群、DGC群、精子洗浄法+Swim-up群、精子洗浄法、単層法と分類した。5群間の妻年齢、受精率、Day5胚盤胞率、タイムラプスを用いて極体放出から前核出現までの時間(分)、さらに融解胚盤胞移植の妊娠率を比較検討した。               |
| 個人情報の取り扱い：                      | 個人が特定できないように連結可能匿名化を行い、個人情報を保護しています。   |
| 本研究の資金源<br>(利益相反)：              | なし   |
| お問い合わせ先<br>：代表電話<br>：担当者(部門・氏名) | 06-6534-8824 生殖技術部門 林智菜実   |
| 備考                              |  |